

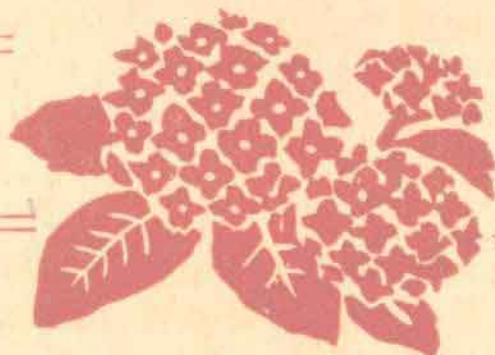


角川文庫

—1398—

怪談・奇談

ラフカディオ・ハーン
田代三千穂訳



角川書店



角川文庫

怪談・奇談

昭和三十一年十一月十日 初版発行
昭和四十年五月二十日 二十二版発行

定価百拾円

訳者 田代三千穂

発行者 角川源義

印刷者 中内あき子

東京都豊島区高田南町一ノ六四

発行所

東京都千代田区富士見町二ノ七
振替東京一九五二〇八
株式会社 角川書店

電話東京(265)七二二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

中光印刷・田中製本

怪 談 ・ 奇 談

ラフカディオ・ハーン
田代三千穂訳



角川文庫

1398

目次

怪談

耳なし芳一のはなし	八
おしどり	三
お貞のはなし	三
乳母ざくら	三〇
はかりごと	三三
鏡と鐘	三七
食人鬼	四四
むじな	五二
ろくろ首	五四
葬られた秘密	六七

八 三 三 三〇 三三 三七 四四 五二 五四 六七

雪おんな

青柳のはなし

十六ざくら

安芸之助の夢

力ばか

奇談

鳥取の蒲団のはなし

死人が帰って来たはなし

倩女のはなし

振袖

因果ばなし

和解

普賢菩薩のはなし

衝立の乙女

死骸に乗る者

七 七 八 九 九 九

一〇四 一〇〇 一〇五 一〇三 一〇二 一〇一 一〇〇 九八 九七 九六 九五 九四 九三 九二 九一 九〇 八九 八八 八七 八六 八五 八四 八三 八二 八一 八〇 七九 七八 七七 七六 七五 七四 七三 七二 七一 七〇 六九 六八 六七 六六 六五 六四 六三 六二 六一 六〇 五九 五八 五七 五六 五五 五四 五三 五二 五一 五〇 四九 四八 四七 四六 四五 四四 四三 四二 四一 四〇 三九 三八 三七 三六 三五 三四 三三 三二 三一 三〇 二九 二八 二七 二六 二五 二四 二三 二二 二一 二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 〇九 〇八 〇七 〇六 〇五 〇四 〇三 〇二 〇一 〇〇

鮫人の感謝

約束

破約

閻魔の庁にて

果心居士のはなし

梅津忠兵衛のはなし

興義和尚のはなし

幽霊滝の伝説

茶碗の中

常識

生霊

死霊

おかめのはなし

蠅のはなし

雉子のはなし

忠五郎のはなし

一四

一五

一六

一七

一八

一九

二〇

二一

二二

二三

二四

二五

二六

二七

二八

二九

いつもあること

鏡の乙女

解説

ヘーレン小伝

二四二

二四四

二五二

二五八

怪談

耳なし芳一のはなし

今から七百年あまり昔のこと、下の関海峡の壇の浦で、平家と源氏とのあいだの、ひさしい争いの、最後の決戦が行われた。ここで平家は、一門の女も子供も、またこんにち安徳天皇と記憶されている幼い天子もろともに、まったく滅びてしまったのである。そして、この海や浜べは、七百年ものあいだ、平家の怨霊に悩まされてきた。……ほかのところで、わたしは、そこにいる平家蟹という、奇妙な蟹の話をしておいたが、その蟹の甲羅には人間の顔かたちがついていて、平家の武士たちの魂だと言われている。しかし、このあたりいったいの海へには、今でもいろいろふしぎなことが見聞きされるのである。闇の夜には、幾千とも知れぬ亡霊の火が、水ぎわをさまよったり、波のうえを飛びかたりする。——それは青白い光で、漁師たちは鬼火と呼んでいる。そして、風の吹きすさぶときには、いつも海のほうから、戦陣のときのこえのような、すさまじい叫び声が聞えてくるのである。

以前には、平家の人たちの怨霊は、今よりはずっと落着きがなかった。夜なかに通りかかる船のまわりに現われて、それを沈めようとしたり、また泳ぐ者たちを、しじゅう待ちかまえていて、引きずりこもうとしたものである。阿弥陀寺という寺が、赤間ガ関に建てられたのは、そうした亡者たちの霊を、慰めるためだった。墓地もまた、寺のすぐそばの、浜べの近くに設けられ、そ

のなかに、入水した天子とその重臣たちとの、名前を刻みつけた墓碑がいくつか建てられ、かつこれらの人たちの霊を慰めるために、毎年きまって法会がいとなまれた。寺が建てられ、墓が設けられてからは、平家の人たちも、以前ほど崇りをしなくなったが、それでもやはり、ときどき奇妙なことをした。——これは彼らが、十分な安息をえていない証拠であった。

何百年かまえに、赤間ガ関に、芳一という盲人が住んでいたが、彼は琵琶をうたったり、ひいたりするのが、なかなかうまいというので、世に知られていた。子供のじぶんから、琵琶を弾唱するわざを仕込まれたが、まだ年少のころから、すでに師匠たちをしのいでいた。本職の琵琶法師としては、おもに源平の物語をうたうので有名になった。そして、彼が壇の浦のいくさの段をうたうさいには、「鬼神も涙をとどめえなかった」と言われている。

はじめて世にでた当座、芳一はたいへん貧しかったが、さいわい引き立ててくれるよい知己ができた。阿弥陀寺の和尚は、詩歌や音曲が好きだったので、たびたび芳一を寺にまねいて、琵琶を弾唱させたのである。のちに和尚は、この少年のすばらしい妙技にひどく感心して、寺へきて住むようにと言いだした。で、芳一は、ありがたくこの申し出をうけた。こうして彼は、寺のひと間をあてがわれ、食事と寝泊りのお礼には、ほかに用のない晩に琵琶をひいて、和尚を喜ばせさえすればよかった。

ある夏の夜、和尚は不幸のあつた檀家だんかの法事によばれたので、芳一だけを寺に残して、小僧をつれて出ていった。暑い晩だったから、めくらの芳一は涼もうと思つて、寝間のまへの縁側にでた。その縁側は、阿弥陀寺の裏手の小さな庭を見おろしていた。ここで芳一は、和尚の帰りを待ち、琵琶のけいこをしながら、淋しさを紛らそうとした。夜半すぎたが、和尚は帰つてこなかった。けれども、あたりの空気は、まだなかなかむし暑くて、家のなかでは居苦しいので、芳一はなおも部屋のとにいた。すると、ようやく、裏門のほうから、人の足音が近づいてくるのが、聞えてきた。たれかが庭をよこぎつて縁側にすすみより、彼のまんまに立ちどまった。――が、それは和尚ではなかった。低くてもおもしろい声が、盲人の名をよんだ。――だしぬけで、ぶしつけで、侍が目下の者をよびつけるような調子だった。

「芳一！」

芳一は驚きのあまり、ちよつとのあいだ、返事ができなかった。すると、その声は、またもやあらあらしく、命令するような調子で呼んだ。

「芳一！」

「はい！」と盲人は、おどしつけるようなその声に、ぎよつとしながら答えた。「わたしは、めくらでございます。どなたがお呼びかわかりません」

「何もこわがることはない」と見知らぬ男は、いくぶん声をやわらげて言った。「自分は、この寺の近くに逗留どまりゆうしている者だが、おまえに御用を伝えにつかわされたのだ。自分がいま仕えている御主君は、たいへん高貴なおかたで、りっぱな身分のお供をおおぜいつれて、ただいま赤間

ガ関に、御逗留なされていられる。御主君は壇の浦の合戦の場所をごらんになりたいとお望みで、今日そこを御見物なされた。ところで、おまえが合戦の物語をうたうのが、なかなかうまいとのことを、お耳にせられ、おまえの琵琶歌をお聞きになりたいとの御所望である。で、琵琶をもつて、すぐさま自分といっしょに、高貴なかたがたのお待ちの館へ参るがよい」

その当時では、侍の命令といえは、かるがるしく背くわけにはいかなかった。それで芳一は、草履をはき、琵琶をもつて、その見も知らぬ侍といっしょに出かけた。すると、侍は、上手に手引きをしてくれたが、芳一は、大急ぎで歩かねばならなかった。引いてくれる手は鉄であるし、それに侍が大股にふみだすごとに、がちがちいうので、この人が、甲冑で、すっかり身をかためていることがわかった。——おそらく、当直の警固の武士であろう。最初のおどろきは、消えて、芳一は、わが身に幸運がむいてきたのではないかと、思いはじめた。というのは、この家来が、「たいへん高貴なおかた」と、はっきり言った言葉を思いうかべ、自分の琵琶を聞きたいと所望された殿さまは、きっとえらい大名にちがいないと、考えたからである。やがて、侍は立ちどまった。それで芳一は、大きな門のところへ来たのだと、感づいた。——が、彼はふしんに思った。というのは、阿弥陀寺の本門以外には、町のこのあたりには、大きな門のあることなど、思いあたらなかったからである。「開門！」と、侍が叫んだ。すると、門をぬく音がした。そして、二人は通りぬけて行った。それから、庭の空地をよこぎって、ふたたび入口のまえでとまった。そこで家来は、大声で叫んだ。「おい、たれかうちの者はおらんか！ 芳一を連れてきたぞ」すると、いそぎの足音や、襖のあく音や、雨戸をくる音や、女たちの話し声などが、聞えてきた。

その女たちの言葉づかいから、芳一には、それがどこかの高貴なお屋敷の女中たちであることがわかった。しかし、自分がどんなところに連れてこられたのか、いっこう見当がつかなかった。が、そんなことを、とやかく考えている暇など、ほとんどなかった。芳一は、助けられて幾つかの石段を登ると、そのいちばん上の段のところで、草履をぬげと言われ、それから女の手に導かれて、磨きあげた板敷の、はてしもなく続いたところを渡り、覚えきれぬほどたくさんな柱の角をまがり、びっくりするほど広い畳敷の間をおって、ある大広間のなかほどへ案内された。そこには、おおぜいの人たちが、集まっているように思われた。絹ずれの音は、まるで森の木の葉の、ざわめきのようだった。また、小声で話しあう、おおぜいの人たちの、ささめく声も聞えた。そして、その言葉は、御殿でつかわれる言葉であった。

芳一は楽にするようにと言われ、気がついてみると、自分のために、座蒲団が出されていた。そのうえに坐って、琵琶の調子をあわせると、ひとりの女——女中の取締りをする老女であろうと思われる女——の声が、芳一にむかって、こう言った。

「では、琵琶にあわせて、平家の物語をうたうようにとの御所望です」
ところで、それをすっかりうたうのには、幾晩もかかるのだった。それで、芳一は思いきって尋ねた。

「物語全部は、なかなか手短かにはうたいきれませんが、どのあたりをうたえとの、御所望でございましょうか」

女の声が答えた。

「壇の浦の合戦の物語をうたってください。それがいちばん、哀れの深いところですから」

そこで、芳一は声を張りあげ、いたましい海のいくさのくだりをうたった。——必死に權をあやつる音、船のつきすすむ音、ぴゅうと空をきる矢の音、人々のさけび声や足を踏みならす音、冑にうち当る刃のひびき、討たれて海におちこむ音のさまなどを、いちいち驚くばかりたくみに、琵琶を弾じてあらわした。すると、うたの合間合間に、左のほうでも右のほうでも、小声でほめそやす声が聞えた。「なんという上手な琵琶師だろう」「わたしどもの国では、こんな琵琶は聞いたことがない」「国中のどこにも、芳一のような歌い手は、またとない」これを聞くと、あらたに勇氣が湧いてきて、芳一は、前よりもいっそう巧みに、弾きかつうたった。それで感嘆のあまり、彼のまわりは、ますますしんと静まりかえった。しかし最後に、美しい人々や弱い者たちの運命——女や子供たちの哀れな最後——幼い天子を腕に抱いた、二位の尼の入水のさまなど語りだすと、聞く者はみんな一様に、おののくような、長い悲痛な叫び声をだし、それからあとは、声をあげて泣き悲しんだが、それがあまり烈しく、物狂わしげなので、盲人は、自分が引きおこした悲しみのはげしさに、われながら驚いたくらいであった。長いあいだ、すすり泣きや悲しい泣声がつづいた。しかし、その悲嘆の声もしだいに消えた。そして、そのあと、ひっそり静まりかえったなかに、芳一はふたたび、老女らしく思われる女の声を聞いた。

女はこう言った。

「そなたが、琵琶のひじょうな名人で、うたうほうでも、並ぶ者はないということは、しかと聞いておりましたが、そなたが今宵しめしたほどの腕前をもった人が、世にあらうとは、思いま

せんでした。わが君さまにも御満足で、相応なお礼をする考えである、とのお言葉です。だが、これから六日のあいだ毎晩一度ずつ、御前で琵琶をひくようにとの御意です。そのあとで、たぶん御帰路におつきになりましょう。それゆえ、明晩もおなじ時刻に、ここへお出むきください。今晚案内した家来が、迎えに参りましょう。……それから、もう一つお伝えするよう、申しつけられたことがあります。それは、わが君さまが、赤間ヶ関に御逗留中に、そなたがこちらへ伺ったことは、たれにも口外してはならぬ、とのことでした。わが君さまはお忍びの御旅行ゆえ、かようなことは口に出してはならぬ、とのお達しです。……では、もうお寺へ帰ってよろしいです」

芳一は、あつくお礼を述べたのち、女に手を引かれて、館やかたの入口までくると、そこに先ほど案内してくれたのと同じ家来が待っていて、うちまで連れて行ってくれた。家来は、寺の裏手の縁側まで、芳一を手引きしてゆくと、別れを告げた。

芳一が帰ったのは、かれこれ夜明けがたであったが、寺をあけたことは、たれにも気づかれなかった。和尚はたいへん遅くなってから帰ってきたので、芳一は寝ているものと思ったからである。昼のうちに、芳一は、すこしばかり休むことができた。そして、自分のふしぎな出来事について、ひとことも洩もさなかった。あくる晩も真夜中になると、またあの侍が迎えにきて、芳一を高貴なかたがたの集まりに連れて行ったが、その席で、彼はまた琵琶歌をうたって、前の晩と同じような成功を博した。しかし、この二度目に参上しているあいだに、彼が寺にいないことが、

はからずも露見してしまった。それで、朝かえってくると、芳一は和尚のまえに呼びだされた。和尚は、やさしくたしなめるような口調で、こう言った。

「ねえ芳一や、わしどもは、たいそうおまえの身を案じていたのだよ。目の見えない者が、一人であんなに遅く出かけるなんて、あぶないことだ。どうして、わしどもに断りもせずに行ったのだ？ そう言っといてくれたら、下男に供をさせることもできたのに。ところで、いったい、どこへ行っていたのだ？」

芳一は、言いぬけるように、こう答えた。

「和尚さま、ごめんください。ちょっと自分の用事がありまして、ほかのときに都合がつかなかったものですから」

芳一が口をつぐんで、隠しだてしているのに、和尚は心を痛めるよりは、むしろおどろいた。これはおかしいと感じ、何かよくないことがあるのではないかと思った。この盲目の少年が、なにかの悪霊にたぶらかされるか、だまされるかしたのだろう、と気づかった。和尚は、それ以上にも聞かなかったが、寺の下男たちにこっそり言いふくめて、芳一の行動を見張らせ、暗くなってから、またもや寺から出てゆくような場合には、あとをつけるようにと、言いつけた。

ちょうど、その次の晩に、芳一が寺を出てゆくところを見つかった。そこで、下男たちは、すぐ提灯ちようちんをともして、そのあとをつけた。しかし、その晩は雨が降っていて、ひじょうに暗かった。それで、下男たちが道路に出ないうちに、芳一の姿はもう見えなくなっていた。よほど急いで歩